

古今集まめなれど、何ぞはよけく、かるかやの亂れてあれど、あしけくもなし、實法めきたる人も、必よき事のみにはあらず、我おこなひの亂りざまなるも、はたあしきむくひのきたるのみにあらずと也、かるかやはみだれさまになる物也、今は一種の草の名にて、茅の類の、長だち二尺ばかりに、秋は葉も穂も共にもみぢする物也、古歌によみしは是にあらず、なべての草のおひたけ立たるを刈て、假初のいほりに取ふく名、神代紀に、野の神を茅野姫と申も、草といはぬは、家にとりふく用を、専らたとむ故也、そのかみは旅ゆきして、野山に夜ごとやどりをつくりてふせりし、それを行廬と云、萬葉集に、秋のたに眞草刈ふきやどれりし、宇治の都の、かりほしおもほゆ、又、我夫子は、かりほつくらす、かやなくば、小松がもとの、かやをからさね、又、拾遺集にもいにしへにならへる歌、旅人のかや刈おほひ作るてふまるやは人をおもひわする、と丸屋を我をまる、是等は荒草なるを、假ぞめの屋をふくとて刈を、刈かやと云也、かやはかりや、つはめ言也又坂上是則の集に、霜枯のあさぢがもとのかるかやの亂て物を思ふ比かな、壬生忠岑の集に、咲花のはかなかるかやにほひつ、人の心をあだになすらん、是等は今の草の名なるべし、又源順のせんざいの歌合せに、ゆく秋の凡そみだる、かるかやはまめゆふ露もとまらざりけり、右の方の歌、うつし植ばつかのまもなくかるかやの三千代の數をかぞふばかりぞ、此判の詞に、此かるかやは、たゞのぶが三千代のかすといへるわたり、秋の、にかるかやにはあらで、春の野に咲けん物の花なん思ひ出らると有て、言の葉の、こはく見ゆれどすまひ草露にはうつるものにざりけるといへるは、何の草にや、詞あきらかならねば、知がたし、

〔八雲御抄草三上〕荳 かるかや たゞかやともいふ たか、や万 を さねかや ねしろた かかやとも

〔古今和歌集十九歌〕題しらす

よみ人しらす